東京学芸大学教育実践研究　第21集　pp. 17-25，2025

毒親とその言動に対する子の捉え方および態度に関する検討

吉田　彩花*・橋本　創一**・板倉　あい**・佐藤　翔子*・田口　禎子***

（2024年11月18日受理）

YOSHIDA, A., HASHIMOTO, S., ITAKURA, A., SATO, S. and TAGUCHI, T.; Children's Perceptions and Attitudes Toward Toxic Parenting: *Examining the Impact of Parental Words and Actions*.　ISSN 2759-4858

This study defined the concept of "toxic parent" and investigated children's perceptions of toxic parenting, identifying typical patterns of toxic parenting behaviors, including how the perception of the mother as a toxic parent influences the child's attitudes toward such behaviors. A preliminary survey developed a 17-item scale for assessing "toxic parenting behaviors." Then, a "toxic parent" was defined and used in the primary questionnaire survey. Participants were 300 people aged 18 to 29 years. Then, the participants were divided into groups based on whether they identified their mothers as toxic parents: the "toxic parent recognition group" and the "non-toxic parent recognition group." The results revealed that participants in the toxic parent recognition group experienced significantly more toxic parenting behaviors than the non-toxic parent recognition group. Significant differences also emerged in the types of behaviors identified as toxic parenting and the toxic parenting scores, with some exceptions. Additionally, children in the toxic parent recognition group exhibited biased attitudes toward their mothers' toxic behaviors. However, the findings of this study are limited by the reliability and validity of the survey methodology and questionnaire design. Future research should address these issues to enhance the robustness of findings and provide more reliable insights into the toxic parenting phenomenon.

KEY WORDS : Toxic Parent, Toxic Parental Behavior

* *Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
** *Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*
*** *Komazawa Women's College*

1．はじめに

近年，"毒親"という言葉がメディアを中心に話題となっている。"毒親"というニュアンスの言葉が初めて使われたのは，アメリカの心理療法家であるスーザン・フォワードが1989年に出版した『Toxic Parents, Overcoming Their Hurtful Legacy and Reclaiming Your Life（和訳：毒になる親 一生苦しむ子供）』[1]という書籍である。その後，日本国内では，2007年～2008年頃に子どもの人生を支配してしまう母親をテーマにした書籍が多く出版され，新聞や雑誌で母娘問題が注目を集めた。さらに2012年頃には，"毒親"という言葉がメディアを中心に一般に浸透し

* 東京学芸大学　教育学研究科
** 東京学芸大学　特別支援教育・教育臨床サポートセンター
*** 駒沢女子短期大学

ていった。この“毒親”という概念は，それまでの「どんなに酷い親でも，子どものことを考えている」という常識を，根本から否定すると言う点で新しいものだった。

このように，近年話題となっている“毒親”だが，厳密にいえば学術用語ではなく，特に日本において，臨床の専門家ではなく，当事者らによって豊かな意味が形成されてきた概念である(高倉・小西，2022) [2)]。加えて，金森・蛭田(2023) [3)]によれば，毒親の研究は当事者の体験談的な文献や，臨床現場において毒親に悩まされてきた者をみてきた論文が大多数を占めており，学術論文として研究された文献はまだほとんどない。

毒親の定義

先述したように，“毒親”は学術用語ではなく，当事者による体験談によって語られてきた概念であるため，その定義は曖昧である。スーザン・フォワードの書籍，『毒になる親』の中では，“毒になる親”とは，「子どもに対するネガティブな行動パターンが執拗に継続し，それが子どもの人生を支配するようになってしまう親のこと」であると定義されている。具体的には，「一章　「神様」のような親」，「二章　義務を果たさない親」，「三章　コントロールばかりする親」，「四章　アルコール中毒の親」，「五章　残酷な言葉で傷つける親」，「六章　暴力を振るう親」，「七章　性的な行為をする親」の７つのパターンに分類されている(Forward, 1989)。フォワードが分類する“毒になる親”には，いわゆる虐待やマルトリートメントと呼ばれるものも含まれているといえる。また，斎藤(2018) [4)]は，“毒親”を，①過干渉，統制型の親，②無視親(ネグレクト)，③ケダモノのような親(激しい暴力や暴言・性的虐待など，心身の健康，時には生命にも関わるもの)，④病気の親(周囲の適切な支援と保護が必要な精神障害の親，ごく少数であるが反社会性パーソナリティ障害のような親)の４つに分類している。斎藤(2018)の分類では，フォワードの分類と同じく虐待と思われる行為の他に，過干渉や統制型といった，明確な境界がなく親の養育態度としての良し悪しが区別しづらいものや，病気の親も含まれている。さらに，高倉・小西(2022)は，毒親概念については主に当事者が言及していることから，当事者によって異なる毒親の定義，あるいは明確な定義がない場合もあるため，そうした当事者の体験に基づく緩やかな集合体が毒親論であり，統一的な定義づけは困難であるとしている。このように，現在毒親の定義はさまざまであり，本研究では，まず“毒親”について定義する必要がある。

毒親が子どもに与える影響

毒親が子どもにもたらす影響は，事例によって多岐にわたるが，社会への適応に困難さ，「生きづらさ」を感じさせることが比較的多い。金森・蛭田(2023)は，毒になる親や家族に悩まされた者は，そうでない者に比べ，家族問題が職業生活全般にネガティブに作用する傾向にあると述べている。具体的には，「生き辛さを感じることがある」，「心を許せる友人や知人があまりいない」，「職場の上司に恵まれていない」といった項目で相対的に高いオッズ比が示されている。加えて，金森・蛭田(2023)は，毒親が子どもにもたらす悪影響の１つを，子どもの「心の傷」と表現し，「親との愛着形成がうまく獲得できず，また，親の価値観に翻弄され，知らず知らずのうちに自分を否定し，社会への適応や他者との円滑な関係性構築が困難となり生き辛さを覚える状態」としている。こうした子どもたちは，人間関係の構築がうまくできない，生き辛いという理由でメンタルヘルス不調に陥りやすく(岡崎・金森，2021) [5)]，自助努力のみでの現状打破はなかなか困難な状況にある(金森・蛭田，2023)。しかし，このような反面，高倉・小西(2022)によれば，毒親をもつ子どもは，親に対して「親は私に酷いことをした毒親である」と思う一方で，「親を責めるな」といった考えを持ち，自罰的な感情に苦しめられ続けるとされている。自分にとって毒である“親”だが，生みの“親”であり，自分に原因があるのではないかという思いが，より一層子どもを苦しめるのである。

このように，「毒親」という概念は，当事者によって捉え方の個別性が高く，加えて，自分の親を毒親と認識できない・したくないといった思いからくる当事者の認識が「毒親」の概念をより不明瞭にしている可能性が伺える。したがって，自分の親を「毒親」と認識するか否かで，同じ母親の行動であっても捉え方が異なる可能性や，その捉え方の変化により，母親の行動に対する子どもの態度に違いがみられる可能性があると考えられる。

以上を踏まえ，本研究は以下の３つのことを主な目的とした。まず第１に，予備調査で，本調査で使用する質問紙作成のために毒親行動の典型パターンを明らかにし，本研究で扱う毒親を定義すること。第２に，母親を“毒親”と認識しているか否かで，同じ母親の言動であっても“毒親行動”とみなすかに違いがみられるかを検討する。第３に，母親を“毒親”と認識した子どもの毒親行動に対する態度に何らかの特徴があるかを検討する。本研究で得られる知見は，“毒親”と称される母親とその子どもに対する支援を検討する際の，毒親に関する基礎的な資料・データとなると期待される。

２．方法

２．１　予備調査

本調査で使用する質問紙作成のため，“毒親行動”の典型パターンを抽出すること，および，その結果から本研究で扱う“毒親”を定義することを目的に行った。

調査日：2022年11月10日

手続き：インターネット上にある“毒親”体験談45事例から，我が子に対する親のネガティブな行動パターンを調査した。中には，身体的虐待，心理的虐待，性的虐待，ネグレクトといった虐待に該当すると思われる事例もあった。虐待と思われる行為のうち，心理的虐待に関しては，虐待と判断される基準が不明瞭であるという特徴と，本研究で扱いたい“毒親行動“との区別が難しいため，身体的虐待や性的虐待，ネグレクトと思われるもののみ除いた。そして，45事例を，４つの大カテゴリ（否定・無視・強要・非難）に分類した。4つの大カテゴリのうち，「否定」は４つの小カテゴリ（存在否定・内面否定・容姿否定・きょうだいとの比較による否定），「無視」は３つの小カテゴリ（体調に関する無視・いじめに関する無視・進路に関する無視），「強要」は９つの小カテゴリ（成績・就職に関する強要・ジェンダーに関する強要・生活習慣に関する強要・学校生活に関する強要・交友関係に関する強要・親への態度や考えに関する強要・年齢の上下を理由にした強要・趣味に関する強要・習い事に関する強要）に分類した。ここでいう「強要」とは，行動の強要・強制だけでなく，価値観の強要も含むこととする。また，「非難」は，主に家族や友人に関する非難の言葉を聞かされることを指す。さらに，これらの“毒親行動”の強弱には，きょうだい間で差があったという事例も多く見られたため，きょうだい間の格差も毒親の特徴に含めた。

予備調査の結果から，本研究での毒親行動の典型パターンは，（1）否定・存在，（2）否定・内面，（3）否定・容姿，（4）否定・きょうだい比較，（5）無視・体調，（6）無視・いじめ，（7）無視・進路，（8）強要・成績，（9）強要・ジェンダー，（10）強要・生活習慣，（11）強要・学校生活，（12）強要・交友関係，（13）強要・親，（14）強要・年齢，（15）強要・趣味，（16）強要・習い事，（17）非難・家族の計17項目となった。さらに，本研究における“毒親”を「言葉による侮辱，偏った価値観の押し付け，兄弟間での対応の格差，子どもへの応答の拒否，といったネガティブな言動を継続的にとることで，子どもに窮屈さやプレッシャーを与える母親」と定義した。なお，“毒親”を母親に限定しているのは，体験談の多くが母親に関するものだったためである。また，母親と父親では子どもにとって“毒となる”行為の典型例がかなり異なっており，それぞれ別の観点から調査する必要があるため，本研究では母親に焦点を絞って調査することとした。

２．２　本調査

調査期間：2023年７月３日～８月23日

調査協力者：18～29歳の計300名に調査を依頼した。

手続き：Googleフォームを利用したオンライン質問紙調査を実施した。

質問紙：質問紙は，（1）フェイスシート（年齢・性別），（2）母親の言動と自分自身の態度について，（3）きょうだい間で格差のあった母親の言動について，（4）自身の母親を“毒親”だと思うか の4つのパートで構成した。なお，幼少期～今までの過去を振り返っての回想法により調査を行った。

（1）フェイスシート：①年齢（18～29歳から選択），②性別（男性・女性・その他・回答しない）を尋ねた。

（2）母親の言動と自分自身の態度：①インターネット上の“毒親”体験談から抽出した毒親行動の典型パターン17項目それぞれについて，回答者の母親の言動を３件法（はい・いいえ・その他）で尋ねた。Table 1に質問項目を示した。②上記の母親の言動17項目それぞれの行動に対する回答者の態度を4件法（A～D）で尋ねた（able 2）。

（3）きょうだい間で格差のあった母親の言動：母親の言動について，きょうだい間で格差があったかどうかを3件法（はい・いいえ・その他）で尋ねた。さらに，きょうだい間の格差について，「はい」「その他」と回答した場合どのような内容であったかを自由記述で尋ねた。

（4）自身の母親を“毒親”だと思うか：本研究における“毒親”の定義を示し，「本研究での“毒親”の定義を踏まえ，自身の母親を“毒親”だと思うか」を３件法（はい・いいえ・その他）で尋ねた。「はい」「その他」と回答した場合は，その理由を自由記述で尋ねた。

倫理的配慮：調査協力者に対し，フェイスシートにおいて，回答の自由と個人情報保護について説明し，承諾を得ている。また，質問紙の回答中に気分が悪くなる等があれば，すぐに回答を中断，アンケートを終了して良いことを記載した。

Table 1　母親の言動

(1)存在を否定するような言葉をかけられた。
　例：「産まなきゃ良かった。」「あなたさえいなければ。」など。

(2)内面を否定するような言葉をかけられた。
　例：「あなたにはがっかりだ。」「子育てに失敗した。」「かけたお金が無駄だった。」など。
　　親戚や知人の前で「出来損ない。」と紹介して侮辱するなど。

(3)容姿を否定するような言葉をかけられた。
　例：「不細工だ。」「太っている。」「整形したら？」など。

(4)きょうだいとの比較を交え，(1)〜(3)のような非難をされた。
　例：「兄は優秀だがあなたは出来損ないだ。」「妹は可愛いがあなたは不細工だ。」など。

(5)風邪をひいたり怪我をしたときに心配されず，心無い言葉をかけられた。
　例：「仮病だ。」「甘えだ。」「我慢しろ。」など。

(6)いじめられたことや，辛いと感じたことなどについて相談しても，まともに取り合ってもらえなかった。
　例：「あなたが悪いんでしょ。」「あなたの勘違いじゃない？」など。

(7)進路について相談しても，まともに取り合ってもらえなかった。
　例：話を聞く前から「ありえない。」と言って聞こうとしない，など。

(8)成績・就職に関する偏った価値観・過剰な期待を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：「１番を取りなさい。」「将来は〇〇になりなさい。」「あなたは優秀なんだからできて当然。」「学歴がすべてだ。」など。
　　勉強が終わるまで椅子から立たせてもらえない，など。

(9)ジェンダーに関する偏った価値観を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：「男は将来家族を養わなきゃいけない。」「女は結婚して子供を産むもの。」など。
　　女性らしい髪型を嫌い，望む髪型にするよう強要する，など。

(10)生活習慣に関する偏った価値観を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：一人での外出を許さない，年相応でない門限がある，家事を押しつける，など。

(11)学校生活に関する偏った価値観を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：部活を休ませる，など。

(12)交友関係に関する偏った価値観を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：「友達といる時間は無駄だから仲良くする必要はない。」「異性と二人きりになるな。」など。

(13)親に関する偏った価値観を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：「親に感謝するのは当然。」「すべて親のおかげだ。」

(14)年齢の上下に関する偏った価値観を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：「お兄ちゃん(年上)なんだから我慢しなさい。」兄弟の世話をさせる。など

(15)趣味・余暇に関する偏った価値観を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：趣味趣向を強く否定される，ゲームや漫画は完全に禁止されている，など。

(16)習い事に関する偏った価値観を押し付けられたり，行動を強要された。
　例：やりたくない習い事を無理にやらされ，辞めたいと言っても辞めさせてくれなかった。など

(17) 家族や友人について，過激な非難の言葉を聞かされた。
　例：「あんな奴家族じゃない。」「あの家は貧乏だから関わるな。」など

Table 2　母親の言動に対する子の態度

A：母親の言動は正しいと思い，賛同した(その通りに行動した)

B：母親の言動は正しいと思ったが，賛同しなかった(その通りに行動しなかった)

C：母親の言動は間違っていると思ったが，賛同した(その通りに行動した)

D：母親の言動は間違っていると思い，賛同しなかった(その通りに行動しなかった)

３．結果

３．１　分析対象

本調査で得られた300名のデータのうち，188名(男性55名，女性130名，その他１名，回答なし２名 平均年齢20.7歳，*SD*=1.56)の回答が得られた(回収率62.7%)。なお，質問項目ごとに欠損値が異なるため，サンプル数(*n*)は項目により異なっている。

３．２　毒親認識群・非毒親認識群

質問項目「(4)自身の母親を“毒親”だと思うか」において，「その他」と回答した者($n = 3$)，および無回答の者($n = 2$)は除き，「はい」と回答した者を毒親認識群($n = 15$)，「いいえ」と回答した者を非毒親認識群($n = 168$)とした。毒親認識群では，回答の理由について以下のような記述があった。なお，記載した内容は，回答者の特定等，回答者が不利益を被ることがないよう，内容が異ならない程度に変更している。「人格否定，自分中心の考え，価値観の押しつけにより，不利益を被ったから」，「子どもを所有物だと思っているから。また，子どもを自分の寂しさを埋めるための人形のように思っているから。自分と違う意見を受け入れられず，癇癪を起こすから」，「優しいときと，そうでないときの気分の違いがはっきりしていた。気分の悪いときは，あらゆることを責任転嫁し，否定される。そのため，一緒に暮らしているときは常に顔色を窺い，気を遣っていた」。

３．３　毒親行動の有無

質問項目「(2)母親の言動と自分自身の態度」において，母親の言動を“毒親行動”とし，毒親認識群と非毒親認識群で，毒親行動17項目それぞれの回答者数を調べた。その結果をTable 3に示した。毒親認識群では，「全くない」が最も多い行動であっても３人に１人が多かれ少なかれ毒親行動があったと回答し，非毒親認識群では，18人に１人が毒親行動があったと回答した。

３．４　毒親得点

各質問項目について，「全くない」を０点，「少しある」を１点，「よくある」を２点として毒親得点を算出した。毒親認識群・非毒親認識群の毒親得点の平均値および標準偏差をTable 4，17の毒親行動それぞれの平均値および標準偏差をTable 5に示した。

Table 3　毒親認識群および非毒親認識群における毒親行動の有無(人)

	毒親認識群				非毒親認識群			
	全くない	少しある	よくある	無回答	全くない	少しある	よくある	無回答
否定								
(1)否定・存在	4	8	3	0	163	8	1	1
(2)否定・内面	1	5	9	0	134	33	4	2
(3)否定・容姿	8	5	2	0	125	40	7	1
(4)否定・きょうだい比較	9	4	2	0	137	30	4	2
無視								
(5)無視・体調	10	4	1	0	138	27	6	2
(6)無視・いじめ	11	2	2	0	154	14	3	2
(7)無視・進路	7	3	5	0	155	13	3	2
強要								
(8)強要・成績	5	2	8	0	128	35	8	2
(9)強要・ジェンダー	8	2	5	0	138	30	3	2
(10)強要・生活習慣	6	2	7	0	126	38	7	2
(11)強要・学校生活	9	2	4	0	162	9	0	2
(12)強要・交友関係	7	4	4	0	160	9	2	2
(13)強要・親	4	5	6	0	137	30	3	3
(14)強要・年齢	12	1	2	0	123	38	9	3
(15)強要・趣味	5	6	4	0	137	29	4	3
(16)強要・習い事	10	3	2	0	154	15	1	3
非難								
(17)非難・家族	6	4	5	0	151	16	2	4

Table 4　毒親得点の平均および標準偏差

	M（*SD*）
毒親認識群(*n*=15)	14.6（7.00）
非毒親認識群(*n*=168)	3.05（3.23）

注）*n* = 183（「その他」と回答した者および無回答の者を除く）

Table 5　17項目別 毒親認識群・非毒親認識群の毒親得点の平均値および標準偏差

	毒親認識群		非毒親認識群	
	n	*M*（*SD*）	*n*	*M*（*SD*）
否定				
(1)否定・存在	15	0.93（.704）	168	0.04（.200）
(2)否定・内面	15	1.53（.640）	167	0.20（.419）
(3)否定・容姿	15	0.60（.600）	168	0.29（.515）
(4)否定・きょうだい比較	15	0.53（.743）	168	0.22（.470）
無視				
(5)無視・体調	15	0.40（.632）	168	0.22（.482）
(6)無視・いじめ	15	0.40（.737）	168	0.11（.370）
(7)無視・進路	15	0.87（.915）	167	0.10（.334）
強要				
(8)強要・成績	15	1.20（.941）	168	0.29（.551）
(9)強要・ジェンダー	15	0.80（.941）	168	0.21（.449）
(10)強要・生活習慣	15	1.07（.961）	168	0.29（.529）
(11)強要・学校生活	15	0.67（.900）	168	0.05（.226）
(12)強要・交友関係	15	0.80（.862）	168	0.08（.309）
(13)強要・親	15	1.13（.834）	167	0.21（.450）
(14)強要・年齢	15	0.33（.724）	167	0.32（.563）
(15)強要・趣味	15	0.93（.799）	167	0.21（.450）
(16)強要・習い事	15	0.47（.743）	167	0.10（.323）
非難				
(17)非難・家族	15	0.93（.884）	166	0.11（.355）

3．5　毒親認識群・非毒親認識群の平均毒親得点について

母親を毒親と認識している(毒親認識群)か，否か(非毒親認識群)と平均毒親得点の間に差があるかどうかを検討するために対応のない*t*検定を行った。その結果，毒親認識群($M = 14.60$, $SD = 7.00$)と非毒親認識群($M = 3.95$, $SD = 3.23$)の平均毒親得点には有意差がみられた($t(181) = -11.713$, $p < .001$)。また，男性と女性で平均毒親得点に差があるかを明らかにするために対応のない*t*検定を行った。その結果，男性($M = 4.29$, $SD = 5.15$)と女性($M = 3.81$, $SD = 4.38$)の平均毒親得点には有意差がみられなかった($t(183) = .650$, $p = .065$)。

3．6　毒親認識群・非毒親認識群において毒親行動得点の高い／低い項目の関連

次に，毒親認識群と非毒親認識群それぞれで，毒親行動得点の高い/低い項目に関連があるかを検討するために，それぞれの群における17項目の毒親行動得点の平均値を算出し，Spearman の順位相関係数を調べた。その結果，相関はほとんどみられず($r = -.002$, *n.s.*)，毒親認識群あるいは非毒親認識群で，母親の行動を「毒親行動」とみなすものがそれぞれ異なる可能性が示唆された。この結果を踏まえ，母親を毒親と認識しているか否かで，毒親行動とみなす行動に有意な差があるかを17項目別に検討した。分析は，毒親得点(17項目)を従属変数，母親を毒親と認識しているか否か(毒親認識群・非毒親認識群)を要因とする一元配置分散分析で行った。その結果，(5)無視・体調，(14)強要・年齢以外の項目で有意差がみられ，

Table 6　毒親認識群・非毒親認識群における毒親得点の群間比較

	自由度	F値	有意確率
否定			
(1)否定・存在	1,181	145.267	＜.001
(2)否定・内面	1,180	125.842	＜.001
(3)否定・容姿	1,181	4.745	0.031
(4)否定・きょうだい比較	1,181	5.480	0.020
無視			
(5)無視・体調	1,181	1.812	0.18
(6)無視・いじめ	1,181	6.738	0.010
(7)無視・進路	1,180	48.747	＜.001
強要			
(8)強要・成績	1,181	32.586	＜.001
(9)強要・ジェンダー	1,181	18.924	＜.001
(10)強要・生活習慣	1,181	25.100	＜.001
(11)強要・学校生活	1,181	47.195	＜.001
(12)強要・交友関係	1,181	49.311	＜.001
(13)強要・親	1,180	48.714	0.949
(14)強要・年齢	1,180	0.004	＜.001
(15)強要・趣味	1,180	30.465	＜.001
(16)強要・習い事	1,180	13.192	＜.001
非難			
(17)非難・家族	1,179	51.993	＜.001

Table 7　毒親認識群・非毒親認識群の子の態度(%)

毒親認識群				非毒親認識群				
従(心)・反(行)	反(心)・従(行)	反(心)・反(行)	無回答	従(心)・従(行)	従(心)・反(行)	反(心)・従(行)	反(心)・反(行)	無回答
6.7%	6.7%	40.0%	26.7%	0.6%	0.6%	2.3%	1.7%	94.8%
20.0%	6.7%	53.3%	6.7%	5.8%	5.2%	4.0%	5.8%	79.2%
13.3%	13.3%	0%	53.3%	15.6%	6.9%	0.6%	2.9%	74.0%
6.7%	0%	26.7%	60.0%	6.9%	8.7%	1.2%	2.9%	80.3%
6.7%	20.0%	6.7%	66.7%	6.4%	3.5%	3.5%	5.2%	81.5%
0%	6.7%	20.0%	73.3%	1.7%	1.7%	2.9%	2.3%	91.3%
0%	6.7%	40.0%	46.7%	0.6%	2.9%	1.2%	4.0%	91.3%
6.7%	6.7%	13.3%	40.0%	9.8%	4.0%	8.1%	3.5%	74.6%
0%	6.7%	40.0%	53.3%	4.0%	2.9%	2.3%	10.4%	80.3%
6.7%	46.7%	6.7%	40.0%	5.8%	4.0%	12.1%	4.0%	74.0%
0%	26.7%	6.7%	60.0%	1.2%	0.6%	2.9%	0.6%	94.8%
0%	26.7%	26.7%	46.7%	0.6%	0.6%	2.3%	2.9%	93.6%
26.7%	13.3%	13.3%	26.7%	6.9%	4.0%	3.5%	2.9%	82.7%
0%	0%	0%	80.0%	13.9%	3.5%	7.5%	1.2%	74.0%
6.7%	33.3%	26.7%	33.3%	4.0%	4.0%	5.2%	5.2%	81.5%
0%	20.0%	0%	66.7%	3.5%	0.6%	4.0%	0.6%	91.3%
6.7%	20.0%	33.3%	40.0%	4.6%	1.2%	0.6%	5.2%	88.4%

母親を毒親と認識しているかによって，得点の高さが有意に異なる項目があることが明らかになった(Table 6)。

毒親得点の高い項目と低い項目を調べるために，17項目の毒親行動それぞれの平均値を算出し，毒親認識群(M =0.80, SD = 0.33)では，平均値± 1SDで高群(1.13以上)と低群(0.47以下)，非毒親認識群(M =0.18, SD = 0.09)では，平均値＋1SDを高群(0.27以上)に分類した。毒親認識群では，「(2)否定・内面」，「(8)強要・成績」，「(13)強要・親」が高く，「(5)無視・体調」，「(6)無視・いじめ」，「(16)強要・習い事」が低かった。非毒親認識群では，「(3)否定・容姿」，「(8)強要・成績」，「(10)強要・生活習慣」，「(14)強要・年齢」が高群だった。

３．７　子の態度について

質問項目「(2)母親の言動と自分自身の態度」について，自分自身の態度を“子の態度”とし，毒親認識群の子の態度について回答率を算出した。各質問項目について，“A：母親の言動は正しいと思い，賛同した(その通りに行動した)。”は，“従(心)・従(行)”，“B：母親の言動は正しいと思ったが，賛同しなかった(その通りに行動しなかった)。”は，“従(心)・反(行)”，“C：母親の言動は間違っていると思ったが，賛同した(その通りに行動した)。”は，“反(心)・従(行)”，“D：母親の言動は間違っていると思い，賛同しなかった(その通りに行動しなかった)。“は，“反(心)・反(行)”とする。その結果，約半数は「(10)強要・生活習慣」について，“反(心)・従(行)”と回答した。また，「(1)否定・存在」，「(2)否定・内面」，「(7)無視・進路」，「(9)強要・ジェンダー」については，約半数が“反(心)・反(行)”と回答した。毒親認識群および非毒親認識群の子の態度の回答率をTable 7に示した。

４．考察

本研究の目的は，毒親行動の典型パターンを抽出し，「毒親」を定義すること，母親を毒親と認識しているかによって母親の行動を“毒親行動”と捉える程度に違いがあるか検討すること，そして，毒親と認識した子どもの毒親行動への態度を検討することであった。

予備調査の結果から，毒親行動には，17つの典型パターンが確認され，さらに毒親について，「言葉による侮辱，偏った価値観の押し付け，兄弟間での対応の格差，子どもへの応答の拒否，といったネガティブな言動を継続的にとることで，子どもに窮屈さやプレッシャーを与える母親」と，調査協力者が自身の過去を振り返っての「毒親」を定義することができた。

本調査では，毒親認識群は非毒親認識群と比較して，性別に関係なく，有意に多く毒親行動を受けていることが示された。これは，単に毒親認識群が母親から毒親行動を受ける頻度が多かったという要因だけでなく，母親の行動が「一般的なもの」とは異なることを認識していた可能性や過去に受けた行動に関する記憶が残っている可能性が伺える。一方で，非毒親認識群においても，毒親行動と類似した行動を受けている者は少なくないことが示された。ただし，彼らは母親を「毒親ではない」と思っているという結果から，①彼らが考える「毒親」と，本調査で示されている「毒親」の定義が異なる可能性，②現段階で母親の毒親行動に対する精神的ダメージが少ない可能性が考えられる。しかし，調査結果からは詳細に把握することはできないため，推測に留まる。また，毒親行動とみなす行動について，毒親認識群と非毒親認識群には一部の行動を除き，違いがみられ，毒親得点にも差がみられた。毒親認識群は，「(2)否定・内面」，「(8)強要・成績」，「(13)強要・親」といった行動が比較的高いという結果であった。この結果から，毒親認識群は，母親が子どもを1人の人間として尊重せず，母親の言動に恣意的なものを感じる場合に毒親行動と捉えていると推測される。一方で，「(6)無視・いじめ」，「(16)強要・習い事」といった行動は比較的得点が低かった。これらの行動は，得点の高い行動に比べて，毒親行動の有無に対する回答に「全くない」が多く，行動を受けた経験の少なさが得点の低さに関与していると考えられる。非毒親認識群では，「(3)否定・容姿」，「(8)強要・成績」，「(10)強要・生活習慣」，といった行動の得点が比較的高かった。「(3)否定・容姿」は，母親の発言によって精神的なショックを受け，記憶に残っている可能性が伺える。「(10)強要・生活習慣」は，子の態度において，“母親の言動を間違っていると思ったが賛同した(反(心)・従(行))”という回答が多く，意思表示や意見交渉が難しかったことが推測される。「(8)強要・成績」については，毒親認識群と非毒親認識群の双方で得点が高い行動であったが，対象者の多くが学生という点で，①母親に成績について触れられる機会が多かった可能性，②自分の成績に対する何らかの思いがあった可能性が考えられる。

また，毒親認識群の母親の毒親行動に対する子の態度について，「(10)強要・生活習慣」は，回答が“母親の言動を間違っていると思ったが賛同した(反(心)・従(行))”に偏っていた。これは，母親と生活環境を共にしている段階では，反抗することで生活に不利益が生じる可能性があるため従わざるを得なかったのではないかと推測される。また，「(1)否定・存在」，「(2)否定・内面」，「(7)無視・進路」，「(9)強要・ジェンダー」は，“母親の言動は間違っていると思い，賛同しなかった(反(心)・反(行))”

に回答の偏りがみられた。これらの行動は，自分らしさといったアイデンティティを，直接的または間接的に否定するようなものだが，彼らが“母親の言動は間違っていると思い，賛同しなかった(反(心)・反(行))”と回答できたのには，①年齢が上がり，コミュニティが広がったことで，自分の母親が「一般的な母親と異なっている」ということを認識できた可能性，②母親のほかに重要な他者が存在していた可能性が伺える。

5．今後の課題

まず，本研究では，過去の母親の言動について回想法で尋ねたが，得られたデータは子どもの記憶や認識に依存しており，信頼性や妥当性の観点で課題が残るといえる。今後は，より信頼性・妥当性を担保した調査手法の選択や質問項目の作成が求められる。次に，本調査には「きょうだい間格差」を尋ねた質問項目があるが，調査協力者のきょうだいの有無を確認していなかった。これは，きょうだい間格差がないことが，実際に“ない”のか，きょうだいがいないために“ない”と回答しているのか判断ができないため，今後改めるべき課題である。また，毒親行動が子どもに与える影響については，更なる検討の余地があるため，倫理的配慮を十分に行ったうえで，今後測定していく必要があると考えられる。さらに，自分の母親を毒親と回答した者の中には，父親から受けた毒親行動について記されているものがあった。母親とは異なる毒親行動や子の態度がみられることが予想されるため，今後は父親に関する調査を行うことで，毒親をもつ子どもに対する支援を，より詳細に検討できる知見が得られると考えられる。

文献

1） Forward. S, Toxic Parents: Overcoming Their Hurtful Legacy and Reclaiming Your Life, Bantam books, 1989（玉置悟訳，2001『毒になる親――一生苦しむ子供』講談社）

2） 高倉 久有・小西 真理子，毒親概念の倫理：自らをアダルトチルドレンと「認める」ことの困難性に着目して，臨床哲学ニューズレター，4，pp.126-180，2022

3） 金森 史枝・蛭田 秀一：親の養育態度が子の社会人生活に及ぼす影響：仕事に影響する毒親から受けた心の傷，総合保健体育科学，46（1），p.33-45，2023

4） 斎藤 学：毒親と子どもたち，論文特集「親子関係の解剖学～その闇に迫る」，2，2018

5） 岡崎敏博・金森史枝：職場におけるメンタルヘルス及びハラスメントへの対応実例 上司の心得としての「定点観測と挨拶のベクトル」，IMH産業精神保健研究別冊，2021